

---

# ルヴィスガーディアン

優希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルヴィスガーディアン

### 【Nコード】

N2053X

### 【作者名】

優希

### 【あらすじ】

世界は平穩に動いている。

しかし、当たり前前の様に流れる表の世界とは程遠い裏の世界がある。少年・早門紫月なまむしげつは数奇な運命から否応なく裏側へと引きずり込まれて行く。

そして、世界は闇に閉ざされる――

## プロローグ

「僕、早門紫月さもんしげつはいつも思っていた。世界各地で小規模な局地戦とあるけど、何が原因で武器を取らざるおえなくなつたのかなつて。どうして戦争のない世界を作ろうとしないのかなつて。

関係のない皆を巻き込んででもやらなきゃいけないことなのかなつて。

よく、平和の為に戦うとか訊くけど、それは間違いだと僕は思う。戦争をするということはそれだけ人や家族がいる。

そんな犠牲の上に成り立つ平和に価値なんてない。

少なくとも戦争で大切な人を失つた人達にとって価値はない。だってそこに居ないから、その平和な日々を一緒に過ごしたいと思う大切な人が居ないと価値は全くない。から……

でも、僕一人そんなことを考えたところで世界が変わるわけでもない。

僕が暮らすこの世界は平和に動いている。

そんな日々が当たり前の様に続くと思っていた。

世界の裏側を視るまでは……」

## 第一話 始まりの夜

早門紫月はどこにでもいるいたって普通の高校二年生。  
夏休みがあげ九月一日。

久しぶりの学校、久しぶりの教室。

久しぶりに会った友人達と夏休みの思い出に会話が弾む。

「よう、久しぶり！」と、親しげに挨拶してきた彼は甲斐幸久かいゆきひさ。

紫月とは小学校からの腐れ縁。

「昨日の今日で久しぶりもないだろ、それに夏休み最終日にゲーセンはどうかと思うけど」と、紫月は溜息をもらした。

「でもあの新作良かっただろ！」

「まあね、僕は格ゲーやシューティングじゃなくて身体を動かす体感ゲームの方が好きだから」

「俺はゲームなら全般的に好きだけど体感はやつと苦手だな。俺には向かない」

幸久ははにかむ。

「僕達って趣味思考が違うのに良く友人やっつけられるよな」

「ははっ確かに俺もそう思うよ」

ガラツと教室のドアが開かれ担任教師・田村優羽たむらゆうが入ってきた。

「はーい。みんな席に着いて！」

その言葉に紫月を含む生徒達は各々の席に戻って行く。

「それじゃ出席を取りますよ。みんな前後左右視て初っ端、欠席してる人は居ないわね」

静寂――

「じゃ、オツケー！」

「ゆうゆう もう少しちゃんとやって下さい」と、女子生徒の一人が声を上げた。

ゆうゆうとは田村優羽のあだ名だ。いつ頃付いたのか解らないが、生徒の間で親しみの意味を込めてそう呼ばれている。

「え〜だつて、めんどくさいしい〜。だ〜れも欠席してないからいいじゃない」

優羽は子供のように駄々をこねた。

「先生も変わらないツスね」と、男子生徒が笑を上げる。

「それじゃ、雑談はこれ位にして皆静かに、連絡事項を伝えます。

文化祭で舞台をやる事になったのね。だから、明日のロングホームルームまでに何がやりたいか各自考えて来といて」

教室内に否定するように「え〜」と言う声が広がる。

「これは決定事項だから。以上、終わり。起立」と、君たちに拒否権はないと優羽は押し通した。

十

ガヤガヤと各自帰り支度を始める。

始業式ともあり今日は昼で終わりなのだ。

そこに幸久が紫月の席にやって来た。

「紫月、お前帰りどうする？」

「別に予定はないかな」

「だったらカラオケいかな〜か？」

「男二人でなんて虚しいな」

「なわけね〜だろ。鷺沢さんと雛木さんも一緒だ」

「はっ？お前、いつ二人と親しくなつたんだ？」

「ああ、夏祭りの時かな。偶然二人と会つてな」

「行こうよ早門くん。迷つたら行行って言うじゃない」と、元気良く現れた彼女が鷺沢愛美。

で、「ふつつか者ですがよろしくお願いします」と、愛美の隣に居る腰まで伸ばした髪が印象的な女の子が雛木藍。藍は愛美とは逆で大人しいタイプだ

十

で……カラオケに入って二時間。

愛美と幸久は部屋にある二本のマイクをそれぞれ独占し入室後ずっと歌い続けていた。

「悪い。ちよいトイレ」と、紫月は席を立ち部屋を出ていくと、後を追う様に藍も出て来た。紫月は疑問に思い声をかける。

「雛木さん、どうかしたんですか？」

「あ、え、多分、早門くんと同じ事……です」と、藍は恥ずかしそうに俯いた。

「……ごめん。察しが悪くて……」

紫月は素直に謝罪する。

「別に、かまわないです。わたしにはチャンスみたいなものだったから……です」

「チャンス？どうして」

「実を言うと盛り上がってずっと出づらかったんです」

「なるほどね。でも、気にする必要ないでしょ。友達なんだし」

「愛美とならそうするけれど、でも、今日は甲斐くんや早門くんと一緒だから、雰囲気壊しちゃいけないと思ったんです」

「幸久に気を使うのは間違いだよ。もし、何か言われても僕が護つてあげるから」

「それじゃ、早門くんが悪いです」と、藍は否定的だった。そう感じた紫月は藍と向かい合い突然、跪いた。

「姫、貴女様の騎士に何なりとご命令下さい。姫の為に剣とも楯ともなつて見せましょう」

紫月は芝居じみた台詞を吐いた。

突然の予期せぬ事に藍は笑を上げる。

「ぶっ、ふふふっ」

その姿に紫月はホッと胸を撫で下ろした。

「よかった。ちゃんと笑えるんだ」

「えっ？」

紫月は立ち上がると笑ってみせた。

「学校で雛木さんの笑った顔、見たことなかったからさ」

効果音をつけるなら「ボンッ」だろうか。藍の顔が真っ赤に染まった。

「でも、ごめんな。こんな事に付き合わせちゃって、楽しくないでしょ?」

「そ、そんなことない…です」と、藍は勢いよく両手を振った。

「そっか、ならいいんだけどね」

顔を赤く染めた藍は俯いた。

「ーーいるからーーです」

「ん、なに?」と、紫月は藍の言葉が聞き取れず訊き返した。

「うっん、何でもないです。独り言だから気になさらなくて結構です」

十

「歌ったー」と、愛美は伸びをする。

八時間ぶりの野外。幸久と愛美は片時もマイクを離す事なくぶつ通しで歌い続けた。

「あのな、雛木さんにマイク回してもよかったんじゃないのか?フリーで八時間もあつたわけだし」

紫月は自分の考を幸久と愛美にぶつけた。

「じゃ、私たちこっちだから、藍、行くよ」と、愛美は完全スルー。

「って訊けい」

「早門くん」と、藍が紫月に近寄ってくると「今日はありがとうございまして」と、深々と頭を下げた。

「いや、そこまでされることはなにも」

「楽しかったです」

「雛木さんがそう言うならよかった」

藍は愛美の隣に並んで帰って行った。

「俺らもここで解散かな」  
藍と愛美の後ろ姿を見送った後、幸久が「じゃ、また明日」と、紫月と幸久は別れの挨拶をするとそれぞれの家路へついた。

十

月明かりに照らされ紫月は川沿いの土手を歩いていった。

「帰り着くの九時近くなるな。フリーはやり過ぎだったかな」  
紫月はため息を漏らした。

「早く帰って寝るかな？」

聞こえるのはたまに通る電車の通過音。

それ以外は静寂の闇。

しかし、何処からともなく金属音が耳朶に響く。

結構近い。

「何か遣ってるのか？」

川縁の方へ視線を落とした。

一瞬、何かが光ったと同時に金属音が鳴った。

紫月は無性に気になり階段を下り川縁に降りた。

そこには、奇怪な世界が広がる。同い年位の女の子と四十位の男が剣を交えていた。

「な、なんだこれ？」

男は紫月の存在に気付いた。

「どうやら邪魔なゴミが居たようだな」

「ゴミ？」と、女の子は視線をやり紫月に気付いた。

紫月は腰を抜かし、その場に座り込んでしまう。

「どうして、こんなところに個体が？」

「ん！おお、君をゴミ呼ばわりしたことをお詫びしよう。世界の《  
均衡者》よ」

紫月は意味の解らない単語に疑問符を浮かべること出来ずに恐怖するだけだった。

「君を殺せば我々の目的は達せられる」

「えっ？」

男がまた、訳の解らない言葉を放つ。

紫月は未だに状況の把握が追いついていかない。

女の子は刀を振りかぶり紫月と男の間に割って入った。

「……今日はこの位にしよう」

「《破格者》が逃げるの。どういつつもり？」と、女の子。

男は剣を構えたまま女の子との間合いを取りながら下がって行く。

「《均衡者》にその《番人》。この街は実に面白い。楽しみは後にとつておこごとと思ってな」と、言い残しながらそこに男の姿はなかった。

「本当に逃げるなんて」

周りを警戒した後、女の子は紫月に向き直る。

「えっ！ただの《個体》じゃないわ」

戦いが終わった今でも紫月は頭はオーバーフローしそうになっていた。

「まさか《均衡者》でありながら《宝煌》をその身に宿した《宝隠個体》。普通こんな世界を見せられたら逃げるか、腰を抜かして震えるかのどちらかよね。取り敢えず今夜のことは忘れるために今は眠るといいわ」

女の子の人差し指が紫月の額に触れた瞬間、紫月は意識を失い深い眠りに落ちた。

## 第二話　く佐久間の塔く

「ふうああつ、オハヨー」

翌日、紫月は通い馴れた教室に入る。

「ハヨー」と、幸久。

「おはようございます、早門くん。眠そうですね、夜更かしでもされてたんですか？」と、藍は紫月を心配した。

「雛木さん、オハヨー」

紫月は大丈夫というように軽く手を上げる。

「不思議なんだけど幸久と別れてからの記憶がないんだよ」

「はっ？」

幸久は奇妙な声をあげた。

「どうということなのですか？」

藍は心配になり問う。

「カラオケ屋の前で幸久と別れたとこまで覚えてるんだけど、目が覚めたら部屋のベッド。いつ頃帰って来たのか。どう帰って来て、いつ寝たのかも記憶にない」

「その歳でもう老化とは……良い奴だったのに、迷わず逝けよ」と、幸久はワザとらしく泣き両手を合わせた。

「老化なんかしてない、っーか勝手に人のこと殺すな」

十

放課後。

紫月は河川敷の階段に腰をおろしていた。理由などなく、ただ帰宅途中だけだった。ひとつ引つかかっていることがある。

そう、昨晚の事だ。

今日一日考えていたがどうしても思い出せない。

「ここを通って帰ったはずだけどな……」

不意に視線を落とすと視線にまだ幼い二人の男の子が玩具の剣で遊んでいた。

その光景に紫月は笑みを浮かべた。

「僕もよく幸久とやって……」

紫月の脳裏に一瞬、ある映像が浮んだ。

「くっ……今の、は……？」

同じ歳位の女の子と四十位の男が剣を交えているヴィジョン。

「……そう、だ……思い出した！」

「やはり特別なのね」

聞き馴れない声が紫月の耳朵に入る。と、紫月は声のした方へ視線を送る。

「君は、昨日の……」

そこには女の子が立っていた。

「ずっとアンタを監視していた」

「僕を……」

瞬間、昨晚の男の言葉を思い出した。

『世界の《均衡者》よ。君を殺せば我々の目的は達せられる』

「……おの男が……僕は、困って事？」

紫月は平常心で答える。

「当たらずとも遠からずね」

「昨日のは何だ！どうして僕が狙われた？」

「簡単な事アンタが只の《个体》じゃないからよ」

「《个体》？」と、紫月は疑問符を浮かべる。

「そうね。そこから説明しなくちゃならないわね。《个体》とはアンタたち人の事よ。《守護者》は人の事を《个体》と読んでいる。

それは、区別をつけるため、存在と人とのね」

「区別？」

「ワタシは《世界の均衡を護る存在》。昨晚の事でワタシたちが普通の人間ではない事は理解してもらえたはず。ワタシたち《守護者》は世界の均衡を護る者。読んで字の如くよ。そして、ワタシが闘っていた相手はワタシとは正反対の存在《世界の均衡を破る存在》。ワタシたちは《破格者》と呼んでいる。奴らは《均衡者》を全て壊し世界を崩壊させようとしている。そして、アンタが狙われた理由。アンタがその要のひとつ《均衡者》だから、それは昨日の《破格者》も気付いている。ども、それだけじゃない」

紫月は疑問が疑問を呼び起こす。

「…？まだ、何かあるのか？」

「アンタは《宝隠个体》。《宝煌》——所謂、宝をその身に隠され个体の事」

「宝、《宝煌》？」

一拍おいて紫月は口を開いた。

「……大体は解ったよ。そして、僕が生きている限りもう平和な世界へは戻れない……戻りたくても、違うか？『関係ない』で済むほど僕はバカじゃない」

「結構理解しているのね」

「だから、君は僕を監視していた……いや、護衛に近いのかな？」

「どちらとも近くて遠いわね。アンタは餌、いわば罠よ。《破格者》を誘き出す為のね」

「ああ、なるほど、効率いい方法だ」

「あら、怒鳴り散らさないのね。真実を知った《个体》は大抵そうするものよ」

紫月は自分の現状を理解し受け入れようとしていた。

「自分ひとり『嫌だ』と騒いだところで置かれた現状が変わるわけでもない。まして、逃げられるわけでもない。だったら君はに任せろ。『餌』だ？『罠』だ？そういつても君が護ってくれる事には代わりはなのだろ」

女の子は無言で紫月を見据え小さく頷く。

「ならいいさ、君に文句を言ったところで何かが変わるわけじゃないから」

「結構、利巧な頭をしているのね」

「君の名前を教えてくださいませんか？」

「ワタシに名前なんてない。必要のないよ。《守護者》として闘う存在であればそれでいいの。この刀・《蒼穹裂牙》シーラウス・アーベルさえあれば闘う事は出来る」と、刀・蒼穹裂牙を紫月に見せる。

「名前が無い？だったら僕が君に名前をつける。君はベル。僕はそう呼ぶ！」

世界の均衡を護る者――守護者。

シーラウス・アーベル  
蒼穹裂牙を持つ女の子。

紫月によりベルと名づけられた

十

「この街の《均衡者》を見つけただですって！リージエルト、それは本当なの？」

椅子に座っている女の声が静寂だった部屋の中に流れる。

「ああ、そうだ。エルメンテ」

昨晚、紫月を襲った男・リージエルトがエルメンテと呼ぶ女に報告した。

「お手柄よ。でも、私は《宝煌》を捜しなさいと言ったはずよ」

「申し訳ない。途中《番人》の邪魔が入ってしまった」

「まあまあ、その辺りで許してあげなよ姐さん。《均衡者》を見つけただけでもお手柄なんだからさ」と、軽いノリの青年がエルメンテの腕を掴み立ち上がらせるとキスができそうな距離まで引き寄せた。

「ギヤウレ、その呼び方は辞めてといつも言ってるでしょ」

「そんなに眉間にシワ寄せちゃダメだよ。綺麗な顔には似合わない」

ギャウレはクサイ台詞を並べる。

「アホが居ます」と、床に座る少女が呟く。

「フリーアエ、あれはアホじゃない、ただのバカなんだよ」と、少女・フリーアエの頭を撫でた。

「これはアホでもバカでもない。姐さんへの愛だ」と、ギャウレは拳を握った。

「あ、愛って、何言ってるのよ。ギャウレ？」

「バカはそれ位にして、エルメンテこれからどうする」

「そうね」と、エルメンテはギャウレを引き離す。

「《執行者》からの新しい使命は来ていないわ」

「そうかつ」と、リージェルトは煙草を吹かす。

「使命は変わりなく《宝煌・約束の恋人》の発見と確保よ」

「今度は私にやらせて」と、フリーアエが立ち上がった。

「…フリーアエ。そうね、じゃ貴女に任せようかしら。好きにやってくれて構わない」

フリーアエは頷くと部屋を出て行った。

フリーアエが部屋を出て行った事を確認した後、ギャウレが言葉を紡ぐ。

「どうしてあんな娘が《佐久間の塔》に選ばれたのか理解出来ない」

「《執行者》の意志だ。それ以外に何がある。俺達みんなそうだろう」

と、リージェルトは返答する。

「意志かつ」

ギャウレは言葉を噛み締める。

「そう、世界の為に私達は進むしかないのよ」

エルメンテは窓の外。真っ青な空を見上げた。

### 第三話 く神の存在く

「は〜い、みんな〜席について〜」

優羽の言葉が教室に響いた。

「今日は転校生を紹介するわね。入ってきて〜」

扉が開き、女の子 ベル（紫月命名）が一人入ってきた。

その姿に紫月だけが目を疑う。

優羽はチョークを手に取り黒板にベルの名前を書いた。

『あまかわそら 天河蒼空』

「天河さん自己紹介をお願いね」

ベルは、優羽に促されるまま自己紹介を始めた。

「始めまして天河蒼空です。父の仕事の都合で転校して来ました」

「男子たちは質問したいことが沢山あると思うけど次の休み時間

お願いね。天河さんの席は〜」

ベルは真ん中の列の前から五列目の席。紫月の左隣、幸久の席で止

まった。

「ここが良いです」

ベルが伝える。

「でもそこは甲斐君の・・・」

「良いですよ先生、俺どきますから。転校生には優しくしないと」

「甲斐君ごめんね」

幸久は荷物をまとめ一番後ろの空いている席に移動した。

昼休み、屋上。

立ち入り禁止のフェンスを乗り越え出て紫月とベルは向かい合っていた。

「取りあえず天河蒼空ってベルの名前なのか？」

紫月は疑問をぶつける。

「アンタが考えている通り偽名よ。前にも言ったでしょ私に名前なんて無い。それよりおかしい、有り得ない、こんな事あり得ない」「何が？」

「この街オカシイの解らない？ってアンタに言っても意味ないか」「説明してもらわないと解らない」

「いい、《均衡者》ってのは一つの街に一人。《均衡者》のいない街もある」

「それが？」

「居たのよ。アンタのクラスにもう一人の《均衡者》が！一つの街に二人の《均衡者》なんて有り得ないのよ。確実に」

「いったい誰？」

「髪の毛長い子よ。休み時間るとき話してたでしょ。彼女よ」

「えっ？雛木、さん」

「彼女、雛木というのね」

「待て！」と、紫月はベルの腕を掴んだ。

「彼女は関係ない。巻き込むな！」

「人聞きが悪いわね」

「雛木さんにはまだ未来がある。僕の歩めなかった先の未来がある。だから巻き込むな」

「それは、彼女への愛というものかしら」

「違う僕と同じ思いを彼女にさせたくない！《均衡者》だ！《守護者》だ！彼女は裏側の世界を知る必要は無い！今いる優しい世界に  
てくれればいいんだ！」

屋上の扉からクラスメイトたちが紫月とベルの姿を覗く。

「二人はどういう関係なんだ？」と、クラスメイトの一人。

「あんな美少女転校生と知り合いなんて許せん！」と、幸久は拳を握る。

「ふざけるな！」

突然、紫月がベルに向かって叫んだ。

「彼女も餌として使うつもりか？」

「使えるものは使う。それだけよ」

ギリツと紫月は歯を鳴らす。

「だったら僕が彼女を護る！」

「戦う？《個体》のアンタが？笑わせないで、どうやるっていうの？」

一拍置いて紫月が意を決して決意を口にした。

「ひとつ手はある。・・・ベル戦い方を教えてくれ！」

「どういうことかしら」

「この先、もし複数で襲われた場合のため。僕も少なからず自分の身は自分で護れないといけないだろ」

十

早朝、河原に紫月とベルの姿がある。

「それじゃこれを握ってみて」と、ベルは瞬間的に刀を出し地に突き立てた。

「これは刀？」

「《宝煌》のひとつ《紅蓮葬牙<sup>くれんそうが</sup>》よ。握れたら戦い方を教えてあげる。握れたらの話だけだね」

紫月は「これくらい」と、いうように《宝煌・紅蓮葬牙》を握った。

瞬間、紫月の手が炎に包まれた。

「アツツ」と、燃えるような熱さを感じ手を離した。

「言い忘れていたけど《紅蓮葬牙》は自分が主と認めた相手しか掴ませない」

生々しい肉の焦げた匂いが周辺に漂う。

「くっ、《紅蓮葬牙》よ。僕は護りたいんだ。その為に力を貸せ！」と、再び《紅蓮葬牙》を勢いよく握った。

十

「今日も転校生を紹介するわね」

優羽の言葉が教室に響く。

「入ってきて」と、優羽の言葉に少女　フリーアが入ってきた。

優羽は黒板に『南彩陽』と、書いた。

「南さん、自己紹介をお願いします」

「はい、南彩陽です。お願いします」と、頭を下げた。

クラスメイトは興味津々とフリーアを見ている。だがベルはフリーアを睨んでいた。

以前、戦ったことのある《破格者》。

しかし、そんなことは余所に紫月は右手人差し指の指輪を見ていた。

十

数時間前

紫月は《紅蓮葬牙》の柄を握った。

刀からの熱さはない。

確実に紫月は柄を握っていた。

「《紅蓮葬牙》がアンタを主と認めたのね」

「これで、戦い方を教えてくれるんだろ」

「《宝隠个体》にして《均衡者》。やっぱり、特別なのね」

「なんで刀が自ら主を選ぶ？意志があるとしても言うのか？」

「そう、《宝煌》は元を辿れば《个体》の魂が具現化した物。この世に大きな未練を残した《个体》の怨念」

ベルは指輪を渡す

「この中に入れて置くといいわ持ち運びやすいでしょ」

「これも《宝煌》？」

「ええ、そうよ」

「どれだけ在るんだ」

「《个体》の未練の数だけ」

十

校舎裏――

紫月、ベルはフリーアエと向かい行う。

ベルはフリーアエに対し不信感を抱いていた。

「アンタが直接来るなんてね」と、ベルは探りを入れるように言葉を放つ。

「知り合いなのか？」と、紫月。

「《破格者》の一人よ」

フリーアエは紫月を見ていた。

「あなた何者なのですか？」

「え？」と、紫月は言葉を漏らす。

「あなたは《均衡者》なんかではありません。放つ波動は似ていますが、もっと別の何か！」

「じゃ、なんだと言うの？」

「この世界の歴史上同じ波動を持つ者がいます。」  
フリーアエは淡々と放つ。

「まさか？ありえない！」と、ベルは察したかの様に否定する。

「名前は《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト》。この世で唯一無二の神と崇められる存在」

「彼が神の血を引いているとでも言うの？」

「真実は知らない。可能性の話なだけ」

フリーアエは感情を崩すことなく淡々と答える。

「《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト》と、紫月は神の名前を口にした。」

「何故、《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト》が神と崇められているか解りますか？」

紫月とベルは知らないと言った。

「一つは《純潔の聖母・エイナ様》により生まれた事。二つ目は、彼には十三の弟子たちがいた。彼らも聖天と名の知られる存在である事。三つ目これが最大の理由、彼は異端児として処刑されてしまい絶命した。しかし、彼は死ぬ直前に弟子たちに言った『私は復活する』と、その預言通りに彼は蘇った」

フリーアエは一息つくように深呼吸をした。

「ひとつ訊くが何でそんなに詳しい？」

紫月は疑問を投げかけた。

その問いにフリーアエは一拍置いて応えた。

「私は…私の本当の名前は《ティナ・イルフェルテ》。あなたがたには《聖女・ティナ》と言ったほうが解りやすいでしょう」

紫月とベルは「えっ？」と目を見開いた。

「そう、わたくしは《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト》の妻。《聖女・ティナ》です」

「生まれ変わりとかですか？」と、紫月。

「いいえ、本人です。《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト

《と、世界を旅し彼の死と復活を目の前で見してきた。その時の躰のまま今までを生きてきました。そしてこれからも今のまま…》

「アンタ、不老不死ってこと？」

ベルはフリアエの言葉を一言で紡いだ。

「あなたがたは《秦帝聖書》や《深零聖書》はご存知ですか？」

「《セフィロト聖書》と《レッドの福音》ですよね」

「正解です。では、《創造詩・シュヴァルツァーザルク》は？」

「？訊いた事ない名前だが」と、ベル。

「でしょうね。《レッド・ジルシュチュアート・セフィロト》本人が自身で記したとされる書物でわたくし自身も存在しているのかわかりません」

「《創造詩・シュヴァルツァーザルク》。生前レッド自身が記した自伝。存在すれば世界を引っくり返す真実です」

「いいえ、彼は生きています。死んでなんかいない。どこかで生きています」

フリアエ。いや、ティアは確信あるように力強く断言した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2053x/>

---

ルヴィスガーディアン

2012年1月11日23時50分発行